

42 介護老人保健施設が腹膜透析患者を通所リハビリに受け入れるまで

医療法人コスモス 介護支援専門員：平田 尚美

I はじめに

近年、医療依存度の高い患者が在宅で療養するケースが増加しつつある。

ケアマネジメントでは「病気」をとらえるのではなく、病気がありながらも在宅で生活していく「人」の視点でとらえ生活全搬を支援していくことになる。しかし、現実には腹膜透析の患者が在宅介護サービスを利用しようとした際にはハードルが高いことに直面した。

今回いくつかの課題を解決して、通所リハビリテーションの利用が可能になった経過について考察を加え報告する。

II 事例概要

- 患者： T氏（男性） / 85歳
- 介護度： 要介護5 / 寝たきり度： C2
経管栄養
- 介護状況：

妻は数年前に他界し、長男夫婦と孫2人の5人暮らし。キーパーソン：長男の妻。同市内に本人の子どもが3人いるが、協力的ではなく、長男の妻が介護を全て担っている。

支援経過：

ケースは以前よりケアプランを担当していた患者であり、入院当初から相談支援を行っていた。「腹膜透析になる場合、通所サービスや短期入所サービスは現状では受け入れ可能な事業所はなく、施設入所も可能性がない。」と家族に話をしたが、（ケアマネジャーとしてこれでいいのか？）と自責の念にかられながら解決策を見出すべく、自分の勤務している施設で腹膜透析患者を受け入れることが可能かどうか働きかけてみようとしたのが始まりであった。

III 施設概要

- 通所リハビリテーション（定員：10名）

*氏名：平田 尚美 所属：居宅介護支援事業所コスモス

〒381-2212 長野市小島田町449 (TEL)026-283-2513

当法人には介護老人保健施設(240床)、診療所

(19床)、短期入所(30床)の施設があり、通所リハビリテーションについても特徴を分けて4箇所で開催している。今回は医療がより充実している診療所の通所リハビリテーションが妥当と考え受け入れに際して課題となる点を分析した。

IV 課題と対応

課題1：

『腹膜透析患者受け入れに対する不安』

今まで腹膜透析患者の受け入れ経験がなく抵抗があったため、ニーズが高いことについて理事長、施設長に理解を求め、他部門への協力要請についても了解を得た。

課題2：

『個室の確保』

大きな障害に思えたが、探してみると会議室、診察室、処置室等あり、結果、常時使用していないレントゲン室を使用することで関係者の了解を得た。

課題3：

『実施する看護師への対応』

- ①腹膜透析に対する不安
- ②看護師の体制確保

①については以下4つの方法で対応した。

- 1) 協力病院に依頼して研修をおこなう
- 2) 病室で実際に研修を行う
- 3) 退院後、本人宅へ訪問し、家族との信頼関係を構築する
- 4) 業者コーディネーターによる指導

②については、通所リハビリテーションの現場は看護師が一人であり、透析に付いてしまうことによる不安が介護職員にあった。また、看護師自身も休暇が取れなくなってしまう不安があった。そこで、ケアマネジャー(看護師)自身も当日は介護現場に入ることにより、看護師の充実を図った。

課題4：

『必要器具の準備』

加温器については協力病院から借りる。計器等についてはその都度本人に持参してもらう。特別施

設側で用意するものはなく対応可能であった。

V 考察

1. 今回の取り組みを契機に腹膜透析について関心を高めることに繋がった。
2. 今回は 3 ヶ月という短い期間で永眠されたが、大変貴重な体験となった。患者自身は入院中、表情や反応がほとんどみられない状態であったが通所リハビリテーションを利用するようになり、笑いや発語、笑顔などの表出もみられるようになり、表情豊かになっていった。
3. 本人の表情が豊かになっていくことで介護する家族の姿勢が日に日に前向きになり、最後は在宅で看取りができたことで、家族の満足の表情をみることができた。
4. 通所リハビリテーションでの取り組みが契機となり、短期入所における腹膜透析患者の受け入れも開始された。

VI 感想

家族との相談時に「在宅介護サービスは困難。」と言ったままにしないでよかった。しかし、現実には腹膜透析患者の受け入れが可能である在宅介護サービスや介護施設はまだまだ少数である。今後は沢山の在宅介護サービス、介護施設が腹膜透析患者の受け入れが可能となるように医療機関との連携や社会資源開発、啓蒙活動に取り組んでいきたい。